

「青紙」から「平地」へ

—— 八行頭子音の唇音退化を証する資料として ——

遠藤 邦 基

法政大学能楽研究所蔵の「天正狂言本（以下・天正本と略称）」

は、天正六（一五七八）年七月吉日の奥書を持つ現存最古の狂言台本であり、現行の狂言台本の固定する以前の古態を残したものとして注目され、それが紹介されて以降、文学・語学の両面において多角的な分析がなされてきた。とくに国語史の世界では、天正本の書写（筆）者が、当時通行の規範的な表記法に拘束されない階層に属していたことから、中世極末期の「なま」の口語を知る資料として、音韻・表記・語法・文字つかい等の面で研究がなされている。

この小考は、天正本に引用されている和漢朗詠集の本文の受容状況を対象にして、本文が受容されていく過程に、天正本成立期の音韻の実態が反映されているということを述べるところにある。

天正本は、江戸期に入ってから多くの狂言台本と異なって、一

部の詞章を含む荒筋のみの梗概的性格のものである。しかし、梗概的といっても、荒筋だけが記載されているのではなく、

○ …程なく参て連歌する 竹生嶋めぐり合たる御ふくかないの
るねかひの今かなひけり (竹生嶋ま

ふて・尚、引用に際し変体仮名は通行の仮名に改めた・以下同)

○ …そふ者歌よまする あはちよりたねまきそめて三葉さし花
さくおわりみのなるはいね (三人わらひ百しやう)

○ …歌よまする 今年よりしよりやうの日記かきそへてよろこ
ふままに所さかへり (三人百しやう)

のように、その狂言展開上の重要なポイントとなる和歌（歌謡・雑物）は、天正本所収の一〇四曲（目録には一五〇曲を載せるが、うち四六曲は本文を欠く）の中に省略されることなく平均して二・五

首程度記載されていることから、天正本の筆者は、曲の展開上間違えてはならない和歌等は、全文を正確に記載しておくという方針を採っていたものと考えられる。

ところで「鴈かりかね」に関しては、例外的に和歌ではなく漢詩（和漢朗詠集）の引用が認められる。いま、左にその全文を載せる。

一、まちこの國の者鴈の以て出る 又か、の國の者かりかねを以て出る 道にて行合てせれふ 都につく おそきとてしからる、そふ者うたよまする さても八幡大らよし家 あへのさたたふむねたふついのはつの御ために あふ州へ御下向まします ある野原に御ちんをとりましたまふ しかる所に鴈一つらとひ来る つわ物野にふせは帰鴈つらをやみたすらん 又山上旅鴈は七めによこたふ水めののしんかう今はたははりをのへす 北との星の前には鴈いをことに そふかこ國にありし時 鴈に文をことつくる それよりして文を鴈しゆといふ つかひを鴈しといへり されはせいしやうの八けひにも帰鴈そ鴈平さのらく鴈とこそいへ いつか帰鴈鴈かりかね 又平さのらく鴈かねとは申候 又かりのしさいをゆふ さても住吉の神主をは うすすみのかんぬしと申なり 年々くくのへむしゆは秋の鴈おとろかす 夜々のゆふせひはあかつきの庭鳥ににたり 鴈へさらくをとんて平地にあかく はやふささうりんを打てきんきをやふる されはある歌に 秋風に初鴈かね

そきこゆなるたか玉つさをかけて来ぬらん 又三ていのわかにも 鴈帰る常世の花のいかなれや月はいつくも同春の夜 とこそよまれたれ そふしや酒のまする まんさうくちゆるす 七鴈かねのつ羽さをのそく内にこそ帰鴈つらおやみたすらん ふへまひ鴈といふも同名のかりかねといふも同名の鴈いになるこそめてたけれ ひやうしとめ

この内容は、ともに「鴈」を献上するために都にのぼった二人の者が、「鴈」の呼び名を、一人は「がん」、一人は「かり」と主張し、故事（漢詩・和歌）を引いてその呼称の由来の正しさを述べるということである。狂言において漢詩を引用する際には、その出典の七割近くが和漢朗詠集であつて、天正本においても五例ある漢詩の引用すべて（「鴈かりかね」四例、「吃り」一例）が和漢朗詠集に基づいており、このことから、当時は和漢朗詠集が想像以上に受容されていたことが判る。

右の天正本の本文で傍線を施した①―③は、和漢朗詠集の次の詩を出典としたものである。

① 山腰帰雁斜索帯 水面新虹未展巾（山腰ノ帰雁ハ斜ニ帯ヲ牽ク 水面ノ新虹ハ未ダ巾ヲ展ベズ）

（巻上・秋・「雁帰雁」・三二五）

② 北斗星前横旅鴈 南楼月下搦寒衣（北斗ノ星ノ前ニ旅鴈横タ

フ 南樓ノ月ノ下ニ寒衣ヲ擲ツ（同右「擲衣」・三四六）

① 年々別思驚秋 夜々幽聲到曉難（年々別思ハ秋ノ厲ニ驚ク

夜々ノ幽聲ハ曉ノ難ニ到ル（同右「擲衣」・三五〇）

② 厲飛碧落書青紙 隼擊霜林破錦機（厲碧落ニ飛ンテ青紙ニ書ク
隼霜林ヲ擊テ錦機ヲ破ル（同右・「厲」霜厲」・三二一・田氏家集卷中）

さらに②のあとに続く「秋風に初厲かねそきこゆなるたか玉つさ
をかけて来ぬらん」の和歌は、古今集（巻四・秋・二〇七）の友則
歌であるが、実は和漢朗詠集では右の①の前に配されている和歌で
あり、その配列順序から考えても、この和歌は直接的には古今集か
らではなく和漢朗詠集からの引用とみるべきであろう。

ところで、天正本で訓読された時と、出典である和漢朗詠集のそ
れとを比較してみると、次のように微妙な差異のあることに気付く。

① 山腰↓山上、煽厲↓旅厲 巾↓はたはり

② 寒衣↓厲い

③ 別思↓へむしゆ 到曉難↓あかつきの庭鳥ににたり

④ 青紙↓平地

これらの差異（変化）は、狂言によく見られるわざと同音や類音
異義語を取り違えて笑いを誘う手法——「黄金の値」と「鐘の音」
（鐘の音）、「真仏師」と「褒」（仏師）など——と異なり、殆んど作

為的なものが見られないという特徴を有している。

漢詩は、本来「からうた、こまあげていひけり（『土左日記』十
二月二十六日）」とあるように、古くから音読されるものであった
が、読み手の知的能力がそれほど高いものでない場合、漢詩の意味
を十分に理解することができず、一部の難解な漢語は、文脈上さし
て矛盾しない身近かで耳馴れた同音・類音語に聞き取ってしまうと
いう事態のあることは、当然想定されることであつた。その典型が
①の山腰↓山上、②の寒衣↓厲い、③の青紙↓平地なのである。い
まここでは、④の青紙↓平地の変化を対象としてとりあげて、和漢
朗詠集の「厲飛碧落書青紙」が、どのような過程を経て、天正本の
「厲へきらくをとんで平地にまかく」になつたのかということにつ
いて、そこには、無意識のうちに当時の音韻変化の実態を反映して
いるということ进行分析してみることとしたい。

なお、①については、エウから（ジ）ヤウへの変化ということ、
才段拗長音の開合の合一化及びヤ行音とジャ行音の交替を、②につ
いては、清音と濁音の交替など、中世末期という時代性を反映した
音韻史の諸問題を包括しているが、問題が多義に亘るため、ここで
は④のみに対象を絞ることとした。

ここで確認しておきたいのは、和漢朗詠集の平安時代に遡る写本
は勿論のこと、それ以降の古筆切をも含めてこの箇所の本文はすべ

て青紙となっていて、天正本のように平地とするものは存在しないということである。そうすると、青紙から平地へと変化した理由としては、天正本の筆者の記憶違い、又は聞き誤り（誤聴）の可能性が強くなる。ところで、セイシとヘイチとを単に音連続体として一音節ずつ区切つて丁寧^レに発音した場合、共通する音節は「イ」のみであつて、セイシとヘイチとの間に接点はない。しかし、先の④⑤に指摘したように和漢朗詠集を出自とする漢詩の異文は、いずれも該当の語句を差し替えてみても文脈上さして矛盾を生じることがないのである。ただ、ここでいう文脈というのは、和歌であれば一首全体、漢詩であれば一句全体を指しているのではなくて、その前後の数語句との結びつきを指しているのである。おそらく天正本の筆者やその観劇者達にとつては、そこに語られる漢詩が和漢朗詠集そのままの文言であつても、多少異なつていても、そのことはさして重要なことではなかつたのではないかと想像される。このことは、中世歌学の世界で、萬葉集にない歌をも出典を萬葉と称する意識⁶と通ずるものがある。その場合、漢字文献である萬葉集を出典と銘記することにより、著者は一種の権威づけをしているのである。したがつて、読み手にとつては、それが実際に萬葉集に存在しているか否かは殆んど問題ではないのである。天正本における和漢朗詠集出自の漢詩も、近接する語句との整合性さえあれば、難解な語句（熟

語）がそのまま意味不詳のまま語られるよりは、むしろ卑近なわかりやすい語句に置き換えられて別の解釈へと拡大していく傾向を持つたのである。

この青空の義の「青紙」から平らな土地の義の「平地」への変化の場合も、古本節用集や下学集などにも登載されていない耳馴れない「青紙」という熟語よりも、ごく一般的な「平地（日葡辞書・易林本節用集等に登載）」と聞き取つたことは容易に首肯されるものである。因みにセイシ（ジ）と同音の熟語は、古本節用集では、西施・制止・清至・清祀・勢至・誓紙（以上・セイシ）政事・青磁（以上・セイジ）を載せるが、文脈上矛盾しない熟語は誓紙くらいであろうか。しかし、誓紙では蘇武説話や鴈との接点を見出せない。そういうことで、狂言という文字（漢字）を介さない聴覚映像の世界では、「青紙に書く」を「平地にあかく」と置換して受容することはそれほど突飛なことではないといえるのである。

○

ところで、このように文脈上の解釈が介在したことによつて青紙が平地に変化したのであるという考えは、実は変化に対する一つの契機を示したにすぎないのであり、何よりも大きな力を及ぼしたのは、この狂言本の成立した十六世紀末期という時期にある——かりに、この天正本の成立時期を中世初期に遡らせたとすれば、この青

紙から平地への変化は生じなかった——ということに気付かなければならない。表現をかえると、青紙が平地に変化していることを利用することによって、天正本の成立した時代の音韻の実態を知ることができるといふことなのである。「膈かりがね」という狂言は、

すでに永祿六(一五六三)年五月十三日の於相国寺八幡勧進能の記録に演題としての記載があり、大筋は現行のものとは大差なかったと思われる。そして、天正本の「膈かりがね」に引用されている漢詩が和漢朗詠集からの直接の引用でなく音声を紹介しての聴覚映像によるものとの立場をとる時、青紙から平地への転換には、あきらかに類音(近似音)に基づく連想が働いているということになる。ここでいう類音に基づく連想とは、共有する音節が近似する際に生ずるものであって、それが音韻として別箇のものであれば成立しない。例えば「フジが美しい(きれいだ)」と言った場合、現代ではごく一部の地域の人を除いて、アクセントによって聞き分けることは可能だといえ、そのフジが富士山のことであるのか、藤の花のことであるのか、その会話のなされた場面によっては必ずしも話者の真意が正確に伝わるとは限らない。しかし、それが平安時代であれば四つ仮名は別箇の音韻として明確に区別されていたため、発音が「[fɯɲi]」と「[fɯɲi]」の如く異なり、特別な修辭の世界を除いてその虞れはまず生じることがないのである。そこで、青紙が平地という

語に受容された場合についても、この変化が決して偶然の結果生じたものではないことを以下に検証することとする。

検証の手順として次の二項に分類する。

(一) 青紙の「セ」と平地の「ヘ」が極めて近い音(類音)となつてゐること。

(二) 青紙の「シ(ジ)」と平地の「ヂ」とが極めて近い音となつてゐること。

現代ではごく一部の地域の言語を除き、サ行頭子音の音価は齒茎摩擦音の「[ʃ]」「[ʒ]」のみが硬口蓋摩擦音の「[tʃ]」である。しかし、中世末期から近世初期にかけては「セ」の音に関しても、当時の標準語であつた上方では「[ʃe]」であつたことは、キリシタンの記述に「関東の言葉では(xeの音節はささやくやうにse又はsoに発音される。例へば xecaiの代わりに ceaiといひ、saxeraruの代わりに saceraruといふ。この発音をするので関東のものは甚だ有名である」とあることなども明白である。つまり、天正本の成立した時期は、ごく大雑把にいえば「セ」の頭子音は「[ʃ]」から「[ʒ]」への移行期であつたのである。

一方、ハ行頭子音もこの時期は両唇摩擦音の「[ɸ]」から声門摩擦音である「[h]」への移行期でもあつた。表記に関して強い規範的意識を持っていたキリシタンのローマ字資料では、ハ行音をすべて両

唇音のFで表記しているのに対し、その意識の稀薄な非キリシタンの英国人（リチャード・コックス）の記した資料では、箱根や浜松の地名をFとHの二種で表記していることは、江戸時代初期の唇音が退化していく過程そのものを反映したものと考えられる。また、十七世紀から十八世紀にかけての一連の仮名づかい書や謡曲の謡い方を解説した書に、ハ行音の発音について「はひふへの仮名ハ柔らかに唇を合せて後開くなり。初より唇を開きて唱へず（京大本謡曲英華抄）」のように詳細な解説がなされているのは、当時の口頭語では両唇音での発音が既に古典的となっていたことを示していると解すべきであろう。日常的でごく当り前な発音については殊更解説は必要としないからである。このように中世末期という時期は、ハ行頭子音がFからHへの変化の渦中にあつたといえるのである。つぎに、青紙の「セ」と平地の「ハ」の両音が、時には聞き誤りや言い誤りを生ずるほどの近い音となっていたことを証明することとする。音声的にみて、「ハ」の頭子音が両唇音の「フ」であれば、同じ摩擦音であっても硬口蓋音の「シ」との接点はない。しかし、ハ行頭子音が唇音を退化させた声門音の「フ」であつたとすると、両音の交代は容易となる。このことは、「シ」の音を「フ」と発音する現代語において顕著である。例えば、放送において頻用される語でアクセントの同じ類音語は誤聴（誤解）を避けるために表

現を変えていることはよく知られている。そのうち、シとヒに關しては、指定と否定、飼料と肥料などはその代表的語彙である。また、この種の誤解は音声言語を記録した速記原稿でも生じやすいことが報告¹³されている。このような交替例は、すでに中世初期の雅經筆本崇徳天皇御本古今集に、「説人不知」を「ヨミシトシラス」とした例や二荒神社本後撰集に「立よりてみるへき人のあはれはこそ秋の林に、しきひくらめ（巻七・四〇八）」のように「敷く」を「ひく」と表記した例があり、そのほか「シタヤコモリ」直隲ト書（天理本千鳥抄・帚木）の如くミセケチされた形も出現する¹⁴。このようなミセケチは、一旦書写した文章を何らかの規範でもって校正（訂正）したものであり、その訂正意図をさぐることにより、その時代の言語意識を推測することが可能である。右の天理本千鳥抄の「シタヤコモリ」の場合も、書写者はおそらく頭初の表記そのままに「シタヤコモリ」と発音（音読）していたものと思われる。それをのちに親本と照合した際、それが規範に反した表記であることに気付いて訂正したものと推測できる。

いずれにせよ、最も規範的表記意識が働くはずの古典の書写という作業の中に、たまたま音声言語が姿をあらわしたという意味で、古今集の「ヨミシトシラス」、後撰集の「もみちひくらめ」千鳥抄のミセケチの存在は、当時のハ行頭子音の音価の実態を知る好資料

となるのである。

しかし、このように中世初期に遡れるシトヒの交替例が存するからといって、八行頭子音の唇音退化が急速にすすんでいたわけではなく、変化の速度は極めて緩慢なものであったようである。したがって、斯様な交替例が表記に反映するのは稀なことであった。例えば、すでに報告されている十六世紀中頃までの交替例は、

○ 旭押世時令（輝世佳路通用）（日本一鑑註）

○ 仲哀天皇葬三枝椎木間一

（元亀二年京大本運歩色葉集行・卷一・三十二）

泥シテ

○ 世界ノカ、ル時分民ノシガウタ時ニ、独リ正ケレバ危ゾ

（同右・卷三・三十九ウ）
（土井本周易抄註・卷五・十一ウ）

○ 点額シ尾シレラスツタ

などあるが、いずれもその表記に疑問が提出されている。

したがって確実な例としては、すでに指摘されている、

○ 御たいくつなくせ志是非御心かけ候て

（小寺孝高宛秀吉書簡・天正五年七月二十三日）

○ 西御方ヨリ阿茶丸へ水干ノシモ紐給了

（言経卿記天正十五年五月十三日）

などまで待たなければならぬ。

それに対して江戸時代になると、この交替現象に関する記述は急激に増加する。例えば、享保十二（一七二七）年刊の音曲玉淵集に、

○ さの仮名はと紛れぬやうにいふへき事

（卷一・三十二ウ・語例省略・以下同）

○ しの仮名ひと聞えぬやうにいふへき事（卷一・三十三）

○ ひの仮名しと聞えぬやうにいふへき事（同右）

という項目を立てているのは、傍線を引いた両音が誤聴されるほど近しい音になっていることを前提にした注意書である。また、慶安

三（一六五〇）年刊の嘉多言に、

○ 捨るといふへきを、ふつるは如何、又ふててなといへるは心

かはれり（卷二）

○ 人を叱るをひかる、叱と書歎（卷三）

○ ひたたれを、したたれとはいはず（同右）

○ ひちりきを、しちりき（卷四）

とあるのは、俗語の使用に寛容であった貞門俳諧の世界で、「ふつる・ひかる・したたれ・しちりき」等の非標準語的詭語を俳句に用いる人が多くなつたことへの警鐘であるという点で、書記言語の側からの代表的分析といえよう。

またこの時代には、表記に反映しがたいはずの辞書にまで、この八行とサ行の交替した形を拾うことができる。いま、三卷本色葉字

類抄の平安極末期写の前田本（下巻の一部及び中巻を欠く）と、江戸時代の写本である黒川本とを比較対照し、その用例を左にあげる。

	(前田本)	(黒川本)
文蛤（動物）	イタヤカヒ	イタカカシ
輔弼（疊字）	ホヒツ	ホシツ
白鮮（植物）	ヒツシクサ	シツチクサ

右にあげた訛形や、先掲の音曲玉淵集・嘉多言の記述など、いずれもヒツシの交替例が圧倒的に多いが、これはハ行頭子音のうちで、喉音系の音に声門音化が早かったことと関係すると思われる。

ところで、音韻としてはともかく、音声的には声門音の「フ」が古く存在しなかつたわけではない。オノマトベの世界では、萬葉集で馬の声を「イ」で表記していることが知られているが、これなどは当時は国語の音韻体系の中に「フ」の音が存在していなかつたために、「フ」にもっとも近い音としてそれを脱落させた「フ」の形で写音したものと解かれている。

このほかにもオノマトベの世界では声門音の「フ」を写音するために、発音位置が近似していることから、サ行音でそれを表記することがあった。

○「御（ミ）をくりせんとしつれと」（ミ）きんち（ミ）はよからんときにおこ（ミ）

とておはしましぬ」とて し、となく

（桂宮旧蔵本蜻蛉日記・中巻・天祿二年六月）

○「まつ（ミ）いかなる御こ、ちそと 里にて思ひたてまつるよりも山にいらちたてはいみしく 物のおほえはるることなく ぶさすまるなり」とて し、となく （同右）

平安時代は勿論のこと、それ以降においても、「ししと泣く」の表現はこの蜻蛉日記以外に例をみない。また、蜻蛉日記の諸本を対照しても、「しし」を国会図書館本・大東急記念文庫本など数本に「し」とするものはあるが、それ以外の異同はない。なお、契沖の書入れを引用する秋成筆本（学習院本）や阿波国旧蔵本等に「よ、」の傍記を見出すが、この傍記の意味するところは、「しし」としか読めない字体を目にして書写者が納得できない気持を、この傍記によつて表明したものと考えられる。この「ししと泣く」を、現行の注釈書の多くは「泣きじやくる」というように擬態語として解しているが、当時の平仮名は濁音表示法を持たないこと、また、「はねたる文字 入声の文字の書きにくきをは皆捨てて書くなり（無名抄・仮名序の事）」のように、特殊音節は表記しないというのが標準的表記法であつたため、「ししと泣く」の「しし」は「シット（ジツト）」「シント（ジント）」「シート（ジート）」の音声を包括していることになる。しかしながら、そのいずれであつても泣いている様

子や泣声との結びつきを持たない。少なくとも蜻蛉日記の二例とも、文脈からは声を殺して泣くのではなく「泣き声をあらわす擬声語しくしく（新大系）」のように、声を出して泣いていると考えるべきであろう。つまり、喉（声門）からしほり出す悲鳴に近い「[ɥ:]」

という泣声を写音するにしても、当時は音韻として「[ɥ:]」の音が存在していなかったため、それを仮名で表記する術がなかったのである。この「しし」を現代語でいうと、「ヒーヒー」「ヒクヒク」という泣き声をあらわしていると考えられる。因みに「しくしくと泣く」についても、日葡辞書では「シクシク 副詞 シクシクトナク。かすかな声で弱々しく泣く」と擬態語的な説明を加えているが、現代語にも泣き声として「ヒクヒク」の交替形を持つことから、「シクシク」も語源的には擬声語であった可能性が強い。ただ先にも述べたように、「しし」の語が蜻蛉日記のみの孤例であることから、この語は蜻蛉日記の作者独自の個人的で臨時的語形であった可能性が強い。

いずれにせよ、声門音の「[ɥ:]」をサ行音で表記する手法は、写音というオノマトペの世界で、平安時代から存在していたのである。そしてオノマトペ以外の語彙にその交替形が認められないのは、当時はハ行頭子音が「[ɥ:]」という唇音性を保っていて、ハ行音とサ行音とは全く接点を持たない別箇の音であったためなのである。この

蜻蛉日記の例を、ハ行頭子音の声門音化の初期の例とする考えも提出されているが、むしろ逆で、未だ声門化が生じていないからこそ「[ɥ:]」音をサ行の仮名で表記したと解すべきである。

ハ行頭子音が唇音性を退化させ、時として声門で発音するようになってはじめて両音は近似化し、音声言語については誤聴が生じ、更に遅れて書記言語にそれが表記されるようになるのである。

背（紙）から平（地）を連想した背後には、このようにハ行頭子音の声門音化の流れが大きく作用していたのである。

○

右の推論を補足するのに好都合な例がある。天正本の「膈かりがね」に、「煽膈つらをやみだすらん」という文言が繰り返して二度使われている。一つは④の漢詩のすぐ前にあり、今一つは、末尾に近く「膈かねのつ羽さをのそく内にこそ 煽膈つら^{（つら）}おやみだすらん」の箇所である。この二度に亘って繰り返される文言は、他本での引用のない天正本のみの独自文とは異なり、江戸時代の主要狂言本すべてが引用しているのである。いま、その数例を右にあげる。

○ きがんつらをやみだすらん／きかんつらをやみだすらん

（虎明本）

○ 兵書云 ^{フハモノフストキニ} 兵伏し野 ^{ヒカサシメテウツラフ} 飛雁乱行

（同右・頭書）

○ 煽雁列をや乱すらん

（天理本狂言六巻）

○ 煽雁列をや乱すと云／煽雁列おや乱すらん (同右・抜書)

○ きがんつらをやみだすといふ／煽鴈つらをやみだすらん

(和泉流古本六義)

○ 煽雁行フツヲ乱ムス／煽雁行フツヲヤ乱ラン (驚保教本)

○ 煽鴈つらをや乱らん／煽鴈つらおやをみたすらん

(狂言記拾遺)

○ 煽鴈つらをやミタす覽 (驚忠政本)

○ 飛雁つらをや乱すらん／煽雁つらをや乱すらん (虎寛本)

○ 飛雁行を乱すと云／飛雁行フツをや乱すらん (狂言集成)

ここで注目したいのは、傍線を施した「煽(飛)鴈」という語である。天正本以降、大半の狂言本では「煽鴈」とあるが、江戸時代中後期の虎寛本(一七九二写)あたりから「飛鴈」が優勢となる。

この事実のみに限定すると、飛鴈の形が出現するのは十八世紀頃からということになるが、右に記したように虎明本の頭書に兵書を出典として飛雁が引用されていることから、十七世紀中期にはすでに飛鴈とする本文も通行していた可能性がある。

ところで、「煽(飛)鴈列をや乱す」という表現が如何に慣用化していたかということは、世阿弥作といわれる敦盛に「籠鳥の雲を恋ひ煽鴈列を乱るなる」とあること、更に、浄瑠璃の伽羅先代萩にも「野に伏勢有ル時は、煽鴈連を乱すとかや」とあるなど、数多く

の用例に接することができるが、これらはいずれも「煽鴈」となっている。また、この慣用的表現の出典についても俄に断じ難いが、少くとも虎明本の頭書にある如く文体的には和文ではなく漢文訓読体であることは間違いない。

ところで、天正本にいう義家の奥州遠征の説話は、次の古今著聞集(書陵部本)を初出とするようである。

○ …一行フツの鴈飛フツさりて刈田におりんとしけるが、俄におどろきて、つらをみだりて飛煽けるを、將軍あやしみてくつばみおさへて、先年江師のおしへ給へる事あり、夫軍野に伏す時は飛鴈つらをやぶる此野にかならず敵ふしたるなるべし

(巻九・三三七)「源義家大江匡房に兵法を学ぶ事」
ここでは、煽鴈・飛鴈のいずれであっても文脈に矛盾は生じないが、「煽鴈」とする本文を持つ写本が存在しないことに注目したい。そうすると、この慣用表現は大略次のように変化していること(「やぶる」から「みだす」への変化に関しては、いまは対象としな

い)となる。
飛鴈つらをやぶる↓煽鴈つらをみだす↓飛鴈つらをみだす
右の古今著聞集のように、文脈によつては飛鴈・煽鴈のいずれを選択してもさして文意に齟齬の生じないこと、また、すぐあとに引く蘇武説話に基づく漢詩(和漢朗詠集)に「山腰煽鴈…」とあるこ

などがこの変化を促した要因の一つであろうが、何よりも両語の音の類似していることを見逃してはならない。つまり、飛鷹の頭音の「ヒ」と焔鷹の頭音の「キ」は、前者が声門音の「ヒ」、後者が軟口蓋音の「キ」で多少異なるが、ともに声門近くで発音される音であるという共通性を有している。ハ行音とカ行音とが音的に近似していることを証すものとして、次の記述がある。

○ はつちらア芝居が始ると、毎日ひて見るから、ははりめく
に見はぐるといふ事ア、ございやせん

(式亭三馬「戯場粹言幕の外」巻之下)

この会話は「でんぼうはなくなったの女」、つまり鼻梁の無い人の発音ということである。ところで、こうしたカ行音とハ行音の交替は、現代方言でも、「ヒナクサイ」「ハケル(駆)」「ハクラン(雀乱)」「ビザハシ(階)」など数多く存するが、この現象が生ずる要因としては、あくまでもハ行頭子音が声門音の「ヒ」に変化していることが絶対的な条件なのである。頭子音が両唇音の「フ」であったならば、理論的に「ヒ」との交替はありえないはずである。勿論、ここで十二世紀中頃成立の古今著聞集の「飛鷹」が、謡曲の教盛で「焔鷹」となったことについて、この変化を直接的に結びつけるわけではない。しかし、この二語が置き換えられた背後に、音声言語でのハ行頭子音の声門音化のあることを除外して語るわけにはいかない

のである。要は、天正本の書写された時代というのは、口頭語の世界ではハ行音が声門音的に発音されることは珍しくなかったということである。にもかかわらず、その時代には未だ表記に反映した例が稀であるのは、表記の持つ保守的な規範意識に従ったまでのことなのである。このような慣用的表現の中における「飛鷹」から「焔鷹」への変化は、ちょうど時期を同じくして、ハハ(母)がカカの語形を派生させたのと同じで、ハ行頭子音の唇音が退化していく実態を証する貴重な資料となるのである。

○

つぎに、青紙の「シ(ジ)」と平地の「ヂ」の問題に触れる。結論から先に述べると、この四つ仮名の混同を前提とした「ジ」から「ヂ」への変化は、通史的には天正本に先立つ時期にも存在することが報告されているが、別語を連想喚起する形態としては初出に近いものである。なお、「青紙」の読み方については、濁音表示のなされた各種辞書や日葡辞書にこの語を標出したものがなく、また、付訓を持つ中世末期頃までの和漢朗詠集の諸本にも「シ」に濁点の加えられたものがなく、「セイシ」と読むか「セイジ」とよむかの極め手を欠いている。しかし、上接の「青」の尾子音は音韻「[e]」であって、日本漢字音ではイ表記をとる「[i]」の愛・害・対などとは韻尾を異にしている。したがって、文明本節用集などでは両者を

區別して、前者の如く鼻子音の「[i]」に続く詠・映・命がサ変動詞となる際には、連濁して詠ス・映ス・命スと表記され、単純母音の「[i:]」である後者は、非連濁の愛ス・書ス・対スとなることが知られている。つまり、鼻子音に接する「紙」は、「青海波」を「セイガイハ（弘治本節用集・日葡辞書）」と連濁するのと同様に、「青紙」も連濁して「セイジ」であったとの立場の許に論をすすめる。

セイジからヘイヂへの変化（連想）は、右に述べたことから四つ仮名の混同を前提にしたものといえるのである。既に詳しい報告があるように、天正本には四つ仮名に関する多数の混乱例があるが、この「青」の「イ」が右に述べたように鼻子音であったとすれば、

○ しのぶもちずりたれゆへに

（狩野文庫本伊勢物語二條家説曲清濁密訣・二段）

○ ぢづは舌のにこりゆへ鼻にかくる…たとへば邯鄲の曲に、くすりのミづもいづミなれハ…

（京大本唱曲弁疑・八ウ）

○ しちすつの濁仮名 じずハ常のことく、ぢづハ吞て唱ふ…此吞といふハ舌を齧へ当、息を半分鼻へ抜也

（京大本謳曲英華抄・十三ウ）

という記述や、「すつしちの仮名を濁るに、つとちとはつめて出し鼻へかけて濁る（以敬齋口語聞書）」等の記述を勘案すれば、実際の発音は「セイヂ」であったものと思われる。もっとも、その際の

「ヂ」は破裂音の [dʒi] ではなく、すでに破擦音化した [dʒi:] であったと推定される。

四つ仮名の混同を前提にした笑話については、醒睡笑（巻二）や昨日は今日の物語（上）に載る小路を小牛と誤った説話が有名であるが、そのほかにも次のものがある。

(イ) 「昨日は一日妙円寺といふ寺にあそびつるは」とかたる。「つひに聞かぬ寺や、妙は妙法の妙にてあらうず。えんは」「ぬれえんぢや」「いやとよかきやうは」「麻繩のまはし垣」「ここな人は、字のことを問ふに」といへば「地は砂地ぢや」と。

（醒睡笑・巻三）

(ロ) 中間どもあつまりて、人の名苗字を沙汰しけるが、一人いふやう「おれが殿は名を三度附けられたが、みな腰から下への事ばかりぢや。始めに四郎次郎、二番目に次兵衛、三度目に修理大夫」を尻の大夫と噂しけり。

（同右）

(ハ) 若衆の御姿を見て「さて／＼残る所も御座ない」とてしみる／＼とほむれば、そばなる坊主たちこれを聞き、「仰のごとく御かたちは天下一、おにやけは守護不入ぢや」といはれければ、又そば成新発意の申やうは、「守護不入でも御座らぬ」といふ。「なぜに」「さい／＼ふちやうが出る程に」

（昨日は今日の物語・下）

(二) 二三人よりあひて物のよしあし評判せしが「そんせうそいつ

は賢やつじや。水の中をも濡れずにくゞるやうなやつよ」といへば、一人がいふ様は「それは其方のあまり莽どての言葉よ。

今でもよびよせ水に入れたらば濡れべし。殊に紙子を着せたらば猶ぬれべし」とせり合ける。「しても賢ひ者じや」といひけり。「それは御身の申されやうあし。「了簡の不了簡」といふ物也。人の目にみづにいる時は、ぬれずにくゞる事は扱をき、ねてゐてもいかなことぬれまひ」といふた。

(輕口露がはなし・卷四)

(イ)は、「字」を「地」と聞き誤ったことから生じた笑話で、同じ内容のものが戲言養気集に、類話が昨日は今日の物語にも存することから、この話は、広く流布していたことが判る。(ロ)は、四郎次郎、次兵衛の「次」から「痔」を連想させたものである。痔については、夙に観智院名義抄に「チノヤマヒ、俗云シノヤマヒ(法下・二二三——声点省略)とある。(イ)は、税の一種である「夫徴——労働力として徴されること——」から、「不淨(大便)」を連想したもので、

醒睡笑や戲言養気集にも類話があるが、オチの部分が「ふびやう(夫尻)のてた」となっているところが異なっている。(ニ)は、「水」に「見ず」を掛けたものである。水をミスと表記することは、大山祇神社連歌(天正四年五月九日万句第八)にもあり、辞書にも水引

(梅原本下学集)の例がある。

右の(イ)・(ニ)は、いずれも純然たる掛け詞ではなく、ヂ(ヅ)からジ(ズ)の語を連想喚起したものである。そして語彙の持つイメージと、連想される語のイメージとの落差が大きければ大きいほど笑話の評価は相対的に高くなる。したがって、その連想される語が全くの同音の場合、聞き手に対して頭初から種明しをした謎立ての如く、笑いを誘うことはできない。連想される語が、同音ではなく似て似ざる音、つまり類音であつてはじめてその意外性を表明するものなのである。四つ仮名を介したこのような笑話が、江戸時代初期に数多く記載されているのは、規範としては四つ仮名が各々別箇の音韻であり区別すべきであつた——これを区別しないと無教養の烙印を押される——ことを意味しているのである。このように考えると、青紙のジから平地のヂへの変化は、単純な近似音に依る連想ではなく、音韻変化を背景に持つ、より深度のある性格のものなのである。

○

和漢朗詠集卷上・秋「雁^ハ雁^ニ」の「雁飛碧落書青紙」を、一見そのまま引用したようにしながら、天正本の「雁^ハ雁^ニ」では、「雁へきらくをとんで平地にあかく」というように、「青紙」が「平地」に置き換えられた理由について、音韻史の立場から検討を加え

てきた。この変化の要因は、中世後期に生じたハ行頭子音の唇音退化と四つ仮名の二つ仮名化という現象を下敷にしなければ成立しえないものであった。また、古今著聞集を出典とする慣用的表現の「飛鷹つらをやふる」から、天正本の「焔鷹つらをみたす」の变化も、青紙から平地の場合と同じく、ハ行頭子音の声門音化の徴候を示すもつとも早い時期の資料としての価値を持つのである。

音節文字である仮名による表記では、音韻変化の過程をさぐることは甚だ困難なもので、その極め手となるものを欠くが、ともすれば音韻史の検証資料としては、殆んど顧みられることのなかった斯様な古典に典拠を持つ漢語の置き換えが、実は音韻変化の前兆を示す有力な資料となることを、この「青紙と平地」、「飛鷹と焔鷹」の語彙を例としてここに述べた。

〔注〕

- (1) 笹野堅「能狂言の成型」(『國語と國文學』昭十五年十一月号)
- (2) 古川久編『狂言辞典語彙編』(東京堂)によると、主要狂言本の漢詩引用は三三例あるが、そのうち十九例が朗詠集を出典としている。
- (3) 古今集・和漢朗詠集の諸本ともに第五句は「きつらん」であり、「きぬらん」の本文を持つものはない。

(4) 現在の関西方言でも「喧しい」の強調形として「ジャカマシイ」がある。

(5) 拙稿「しぎのはねがき」と「しぢのはしがき」——古今和歌集成立に関する一解釈」(『王朝』第十冊——塚原鉄雄先生追悼論叢)

(6) 片桐洋一「中世萬葉擬歌とその周辺」(『萬葉』一二六号)

(7) 「石橋勳進能之記異本」(能楽史料「校本四座役者目録」)による。

(8) 拙稿「類音と連想——古代の地名譚を中心にして」(『王朝』——遠藤嘉基博士古稀記念論叢)

(9) 拙稿「四つ仮名と掛詞修辭」(『國語表現と音韻現象』新典社)

(10) 土井忠生訳「ロドリゲス日本大文典」(三省堂) 第二卷 六二三頁

(11) 安田章「ハ行音価と朝鮮資料」(『朝鮮資料と中世國語』笠間書院)

(12) 石野博史「放送における類音語」(『日本語学』一〇卷一号)

(13) 藤村勝巳「連記における類音語の問題」(『日本語学』一〇卷一号)

(14) 拙稿「古今和歌集古写本の異文——規範的表記意識の影響をを通して」(『國語國文』六五卷五号)

(15) この件については「ミセケチと國語史」と題して別稿に纏める予定である。

(16) 福島邦道「日本一鑑所引の古辞書」(『本邦辞書史論叢』三卷堂) 八二一頁。

(17) 安田章「元亀二年京大本運歩色葉集」解題(臨川書店) 五四頁。

(18) 鈴木博「周易抄の國語学的研究」(清文堂) 八二頁。

(19) 大塚光信「誤読・二つの場合——キリシタン物と抄物とを例として」(『國語國文』三十卷四号)

(20) 濱田敦「日本風土記山歌註解」(『國語史の諸問題』和泉書院)

(21) 橋本進吉「駒のいななき」(『國語音韻の研究』岩波書店)

(22) 上村悦子「蜻蛉日記校本書入諸本の研究」(古典文庫)

(23) 柿本獎「蜻蛉日記全注釈・上」(角川書店) 四二五頁・四三七頁。なお、口遊や二中歴に載せる「志々虫鳴時誦」の呪文から、「しし」に「死々(不吉な泣き方)」を連想させる考えもできるが、

この件については別に述べる。

(24) 白石大二「現代語のふるさと」(秀英出版)

(25) 岸田武夫「國語音韻変化論」(武蔵野書院) 三七一頁。

(26) 亀井孝「ハワからハハへ」(『亀井孝論文集3』(吉川弘文館)、拙稿「カカ(母)の出自は幼児語か——諸説への疑問」(『國語語

彙史の研究』三・和泉書院)

(27) 辛島美絵「國語資料としての仮名文書」(『國語學』一四六号) ほか。

(28) 蔵野嗣久「國語資料としての天正狂言本について——音韻表記の特徴を中心に」(『國語國文論集(安田女子大)』三号)

(29) 橋本進吉「國語音韻の研究」(岩波書店) 六頁。

(30) 亀井孝ほか編「日本語の歴史5」(平凡社) 七〇頁。

(31) 今野真二「音韻資料としての大山祇神社連歌——四つがなについて」(『早稲田日本語研究』創刊号)

〔附記〕

本稿は関西大学国内研究員(平成十年度)としての成果の一部である。

(えんどう くにもと/本学教授)